「イタコ」をする離島の女たち

古川智恵子・中田明美

Women in Solitary Islands Who Do "Itako"

Chieko FURUKAWA and Akemi NAKATA

はじめに

三河湾の入口，渥美半島の先端である伊良湖岬と，知多半島の先端である師崎とのほぼ中央に位置する愛知三島は，本土から比較的近距離であるとはいえ，海に取り巻かれていること，本土から隔絶していること，土地が狭いこと等その自然条件には厳しいものがある．この為，離島島民の生活は比較的恵まれず，本土の生活とは格段の差がみられ，離島特有の生活文化がはぐくまれてきた．今回の調査で日間賀島，篠島を訪れた際，絞りをする老女の姿が多々みかけられた．シボを一つ一つ括りながら，とつとつと話す姿は人間としての奥行きの深さが感じられ，幼い頃から絞りと苦楽を共にしてきた女達の生きざまがせつせつと伝わってくるようであった．

本報では，日間賀島，篠島に伝承されている鹿(か)の子(こ)絞りの発展過程と，「イタコ」(絞り) と女達とのかかわりを通して，漁業を生活の基盤とする離島における人々のくらしの一端を浮き彫りにする事を目的とした．

方　　法

1．調査期間　昭和59年4月～61年10月

2．調査地区　日間賀島，篠島

3．調査内容

(1) 各島の古老を訪問し，絞りに関する聞きとり調査を行い，併せて実物資料の写真撮影を行った．

(2) 絞りについての文献資料を収集し，絞りの普遍的な発展過程，種類，及び離島への伝播，定着の過程，変遷，現状等について分析し，考察を行った．

結果および考察

1．鹿の子絞りの発展過程

一口に絞りと云ってもその手法は百数十種類にも及ぶが，日間賀島，篠島では絞りの中でも鹿の子絞りが行われている為，ここでは主に鹿の子絞りについて触れる．

(1) 発祥

絞りは周知のように布の一部を糸等で括ったり縫いしめたり，つまり絞ってその部分に染料の浸透する事を防ぎ，染め上がった時に絞った部分が一種の文様として現われる染色方法である．

その発祥地はインドとされているが，インドのみならず中国，エジプト，ペルーといった古

代文化の発祥地からも多くの遺物とともに絞り染めの裂(きれ)が発掘されている.

絞りの技法は，甚だ素朴な考え方に基づくものであり，原始的で単純なものであるから，古くから自然発生的に各地で始まったと考えられる．しかし他国におけるその後の発展はそれ程著しくなかったが，我が国においてはめざましい技術の発達を遂げ，多様な変化を有する染色工芸として世界に誇り得るものとなっている.

絞りは，日本では3世紀頃，中国から伝えられたと考えられているが，残存資料がない為，中国から伝えられたのか，始めから日本で行われた技法なのか，明確ではない.

しかし，3世紀の日本の実状を記録した「魏志倭人伝」によれば，景初2年（238）倭国から魏へ献上品を贈ったとあり，その中に「斑布二匹二丈」と記されている．この「斑布」とは「縞織の紵麻布である」とか，「草花を摺ったまだら染めの麻布である」等の諸説があるが，後に生まれる「纐纈(こうけち)」の前駆的技法，と考えられなくもない.

絞り染めは以上のように古くから行われてきたと思われるが，実際に絞り染めの布が残っているのは飛鳥時代（592～707）や奈良時代（710～784）以降のもので，飛鳥時代のものは法隆寺に，奈良時代のものは正倉院に伝えられている.

(2) 鹿の子の祖型

図1は奈良時代の緑地纐纈裂である．纐纈とはいわゆる絞り染めの事で，さまざまな技法が行われていたが，写真のような「目交纐纈」が後の鹿の子の祖型と考えられており，鹿の子の歴史がかなり古い事がうかがえる．ただし当時の絞りは全く防染の為の一技法であり，凹凸や縮皺を完全に伸ばしてしまっている為，今日の絞りとは趣を異にしていた.

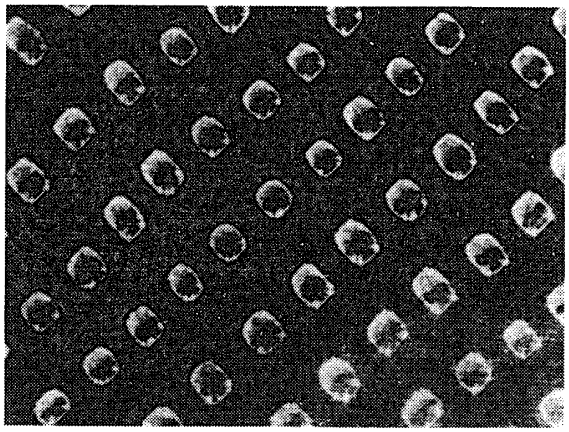

図1　緑地纐纈裂（奈良時代）（東京国立博物館）

(3) 鹿の子の庶民化

文献によると，古今集には「ちはやふる神代もきかず立田川からくれないに水くぐるとは」と歌われ，「あたかも，水を深紅色の括り染にしたように美しく見える.」と表現されている．また，源氏物語には「花づくゑのおほひなどをかしきめぞめもなつかしう……」この「目染」というのは絞り染の事である．このように，この頃から絞り染は「括り染」とか「くくし染」「目染」等と呼ばれ，着物に用いられていた．目染は「目纐」とも称され，奈良時代の「纐纈」の事でこの纐纈は「目纐」「一目纐」「滋目纐」等に分化し，「纐」と呼ばれ盛んに染められた.

平安中期以降には貴族社会の間で織物を好む傾向が生じ，天平の三纐のうち，技術の複雑な蔦纐(ろうけち)と纈纐(きょうけち)は殆ど姿を消してしまった．こうして技術が最も簡単で，麻布に染める事ができる纐纈は庶民の間で盛んに染められ，生活の一部となっていった．当時の絵巻や風俗画等にも，庶民の服飾にしばしば散見している.

図2　扇面法華経冊子（平安時代末）

図2は平安末，即ち12世紀後半頃の庶民の生活が生き生き

と描かれた「扇面法華経冊子」である．女が洗濯した単衣を干しているが，全面に鹿の子模様が染められている．また，図3は鎌倉～室町時代に書かれた「石山寺縁起」であるが，部分的に染め分けたような鹿の子絞りの小袖を着用している．当時の絞りは前述したように，縮皺を伸ばした平面的なものであった．

図3　石山寺縁起（鎌倉～室町時代）

図4　草花扇面模様辻が花胴服襟上杉謙信所用（室町時代）（上杉神社）

(4)　辻が花と鹿の子

室町時代には近世の絞りに大きな影響を与える辻が花が誕生した．この辻が花は当時かなり高級な衣料であり，大名等に用いられたが，桃山時代を一期としてその短いを生涯を閉じてしまった．

図4は上杉謙信所用の草花扇面模様辻が花胴服襟であるが，文様の一部に鹿の子が用いられている．しかし，この頃も絞りのシボはむしろ邪魔に考えられ，皺によってできる染めむらも絞った後，周辺部を絵具で彩色して地直しをしていた．

(5)　鹿の子文様（総絞り）の誕生

鹿の子による文様表現……総絞りは江戸前期に誕生した．辻が花においては，ごく一部分に鹿の子絞りが行われていたが，辻が花が消え去り，その技術が行われなくなると，それは慶長の絞り分けのような大きな形のものに生かされた．それと共にますます精巧なものになっていき，そこに現われたのが総絞りである．この頃から一面に粒のつき上がった立体感を重視するようになったのである．

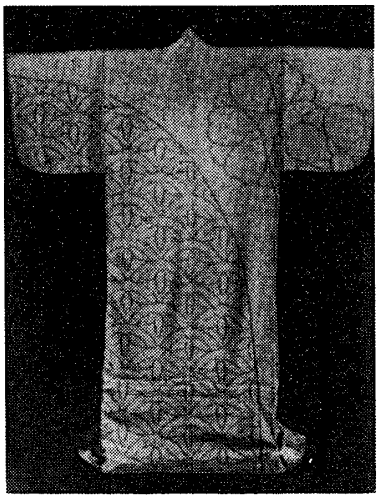

図5　桜に雪持笹模様匹田絞小袖（江戸前期）（東京国立博物館）

図5は江戸前期の桜に雪持笹模様匹田絞小袖で，まったくの手加減で絞ったいわゆる本座鹿の子であり，非常に格調の高い技術のさえが感じられる．

鹿の子の語源は「貞丈雑記」に「右の目結の染物，白星まだらにありて鹿の子の毛皮に似たる故，鹿の子とも言也，かのこは，しかのこなり」とある．鹿の子の毛皮のように見える為，その絞る技法を鹿の子絞りというようになったのである．また，鹿の子絞りを女性が愛用するのは，鹿がぽこぽこと子を産み，しかも安産である為，人間もそれにあやかって無事に子供を産みたい，という願いからであろう，とも記されている．

鹿の子絞りは降起した部分の立体感，染料がにじんだぼかしのような輪郭の面白さが魅力である．また，他の染にはないソフトな美しさがあり，人間の掌の暖かさも感じられる為，女性

に愛用されてきたのであろう．それは着物だけでなく，半衿，帯揚，長襦袢等にも用いられ，美意識の表現だけでなく，男尊女卑の思想のもとで，女達の感情や意志を表現する小道具としても重要な役割を果たしていた．

総鹿の子が余りにも贅沢で華美であった為，奢侈禁止令の槍玉にあげられる事となり，「金紗，縫，惣鹿の子」の使用を禁じた．しかし，それがきっかけとなって型鹿の子や友禅の流行を生んだ．

このような高級な絞りがある一方，庶民染色として特異な発展をみせたものが有松，鳴海絞りであった．

有松絞は，1610年に名古屋城を築城した時，有松に住む竹田庄九郎が豊後から工事に来ていた人々の絞り染の美しさに魅せられ，自ら工夫して木綿に絞り染をしたのが始まりといわれている．その後豊後の医師で晩年有松に移り住んだ三浦忠玄の妻（1645～1652）が絞り染の技法を指導した．これが三浦絞の始まりである．これらは藍一色で浴衣に多く用いられていたが，商品として盛んに売られ，種々な技法が次々と発達し，その伝統は日間賀島，篠島にも及び今日まで伝えられている．

(6) 日間賀島・篠島の家内手芸

第二次大戦後（1945）絞りは家内手芸として全国的に普及した．例えば，岩手の紫根染，秋田の茜染等である．

この流れより先がけて，すでに，篠島では大正初め頃，日間賀島では昭和10年頃に伝わって来た．この頃鳴海，有松の絞り業者が木綿から絹の加工に転換し，京都の友禅染と技術提携し始めた為に，絹の布地に絞り加工するのを内職にまわした為である．

2．離島における絞り

(1) 絞りの定着

日間賀島，篠島においては，当時女は漁に出ず，特に篠島は原始時代から伊勢神宮との関係が深く，慶長年間尾張領に移されるまでは伊勢神宮の神領であり，現在でも御幣鯛（おんべだい）を納めている．日常生活から公的な年中行事にも神宮に関連した風習が残っているが，その中でも特に女性に対する禁忌が強く，神社の祭礼に女を参与させないのは勿論，別火，別居の制度があり，昭和の初め頃まで観念的に残されていた．即ち出産の前後や月経時を汚れと見なし，家族と煮炊きや食事を別にした風習である．

漁業が主体のこの島で漁具の手入れも女に手を触れさせず，釣具だけでなく，網の補修のような女に適している仕事さえもこの島に限ってタブーとされていた．

従って，有松，鳴海から伝わった絞りは最適な女の副業として定着したのである．また，熟練した技術は要するが，家事の合間をみて自由に作業を進める事ができる手軽さも絞りが広がった大きな要因である．

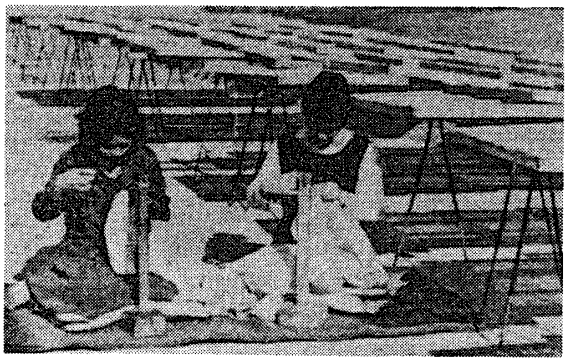

図6　浜での絞り風景（篠島）　昭和40年頃

女達は家事一切を任され，井戸端会議にも花を咲かせる事となり，渥美半島方面の農村で嫁にやるなら篠島へ，ともいわれた．しかし，実際には水道の設備のなかった時代は坂道を水汲桶を担ぎ，海草やあさり等を採取し，子育て等に携わっていた為，想像を超えた苦労もあったと思われる．

絞りの種類は多種あるが，この島には絞りの中で最も高尚で繊細な感覚を持ち前とする鹿の子絞り（機械鹿の子絞り）が主に伝えられた．

(2) イタコと女たちの生活

絞りは「イタコ」とも呼ばれるが，日本髪に用いられた装飾用の手絡（てがら）の事をこの地方ではイタコと呼び，当初はこれを絞っていた為に「イタコ絞り」の名がある．

仕入れは鳴海，有松の他に大高や京都からも入り，日限を決めて各島ごとに集め，出荷した．絞りは技術によって収入が違う為，女達は朝早い時は5時から，遅くは夜の10時，11頃まで絞ったという．当時は図6のようにチリメンの干し場で，あるいは図7のようにセコ（路地）でむしろを敷き，4～5人が集まって腕を競いながら，またおしゃべりに花を咲かせながら絞っていた．また，いつしか流行歌も口ずさみ，にぎやかな明るいコーラスとなって流れ，島内は活気に満ちていた．若い娘達は自分の嫁入仕度の為に，また母親は子供達や夫の安否を気遣いながら，それぞれの想いを込めて絞っていたのであろう．

図7　セコでの絞り風景（篠島）昭和40年頃

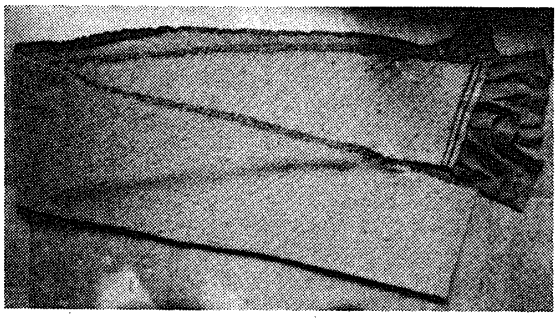

図8　総絞りの兵児帯（日間賀島）

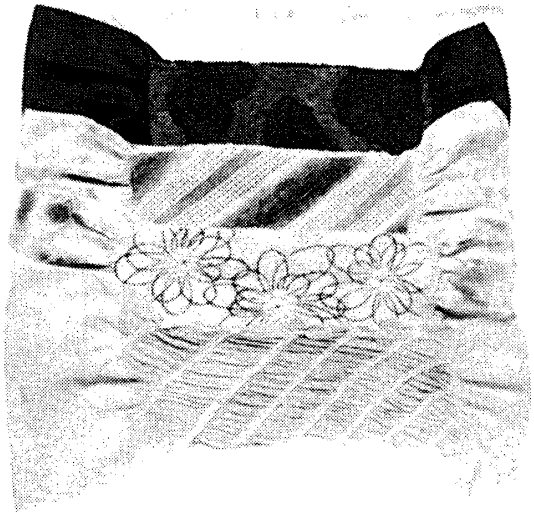

図9　帯　あ　げ（日間賀島）

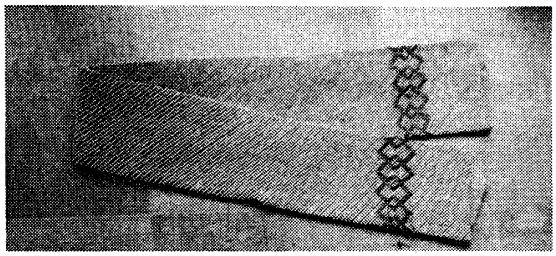

図10　マフラー（日間賀島）

こうした絞りの場は青年達との一つの社交場ともなり，島内での恋愛結婚も多く，漁業の継承者に困る事はなかった．

この絞りは母親の作業を見ている子供達へも自然に広がり，学校から帰ると友達同志で競い合って絞るようになっていったのである．

日本髪が少なくなると図8のような男用の兵児帯，図9のような帯揚げ，図10のようなマフラーと需要に応じて加工品も変化し，和服の部分模様が総鹿の子となり，着物も羽織も高級化していった．絞りは昭和40年前後が最も盛んに行われ，当時一反の工賃は5～7千円，総絞りの兵子帯は1万円前後で，早い者は一反を1週間～10日間程で絞り上げる為，少ない者でも月2万円，多い者は5万円もの収入があった．娘達が男友達におごってやるようなほほえましい情景もしばしば見られたという．女達が片手間に始めた絞りも，この

頃は一家の経済も助け，不況時の漁業収入を上回る事もあった．嫁入り仕度を自分で稼ぐ娘もいた程で，日間賀島，篠島は金持ちだと羨ましがられた．

しかし，これ程盛んであった絞りも昭和45年（1970）頃から韓国への出荷が始まり人件費の安さから工賃も$\frac{1}{3}$程ですむ為，島の絞りは大きな打撃を受けた．また，この頃から愛知用水が引かれ，観光化が進むにつれて民宿，土産物屋等ができ，女達がアルバイトに行くようになって技術を要しなくても高収入が得られるようになった為，後継者も少なくなってしまった．

(3) 島のイタコの技法

イタコの種類は様々で百数十種類にも及ぶといわれる．この島々では，鹿の子絞り，クモ絞り，三浦絞り，突出絞り，重ね絞り，ぬい絞り等が伝わったが，主に鹿の子絞り（機械絞り）が加工された．京都の手結び鹿の子に対して，簡単な絞台（図11）という器具を使用する為，この名称がある．絞台は木製で，高さ40cmの上部に金属性の腕金があり，その先に鉤針がついている．この鉤針に布をひっかけて絞ってゆくのである．

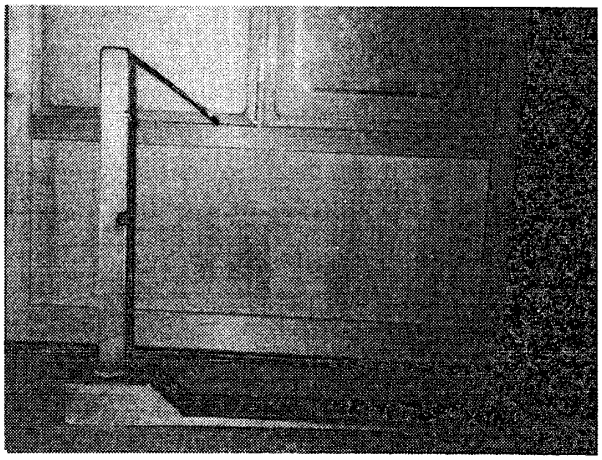

図11　絞　　台（篠島）

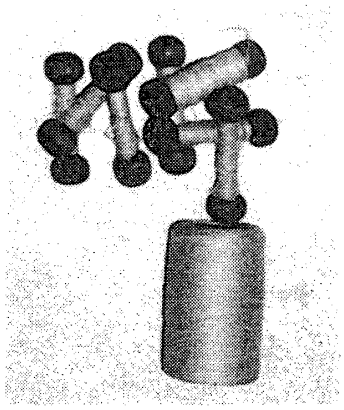

図12　糸巻き管(コロ)（篠島）

括り糸は作業を円滑にする為に，図12のように糸巻き管（長さ6cm，太さ7mmの木製の管，コロという）に巻きとっておく．

機械鹿の子の中にも京極，人目，横引などの区分があり，ここでは横引を用いている．ツユクサの汁で図柄を点々で現わした反物の一点を鉤針にひっかけ，左の親指と人差指で布を内側に折り，右手で糸を括る．この時，糸を縦に引かないで横に引くのが横引である．括る回数によって2回－2つ巻き，3回－3つ巻き，5回－5つ巻きと呼ばれ，回数が多い程に出来上がりも小さく，しっかりした絞りに仕上がる．図13は小紋にバラ絞り（絞りの間隔を粗くする方法）を施す反物であり，図14は総絞りの羽織を絞り上げた状態である．この粒の大きさを揃える事が肝要であり，熟練者の指先から絞られる鹿の子は，一分のすきもない精緻な美の究極である．図15は母親が娘

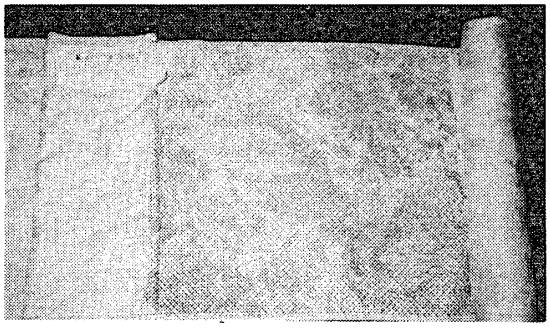

図13　バラ絞りの反物の下絵（篠島）

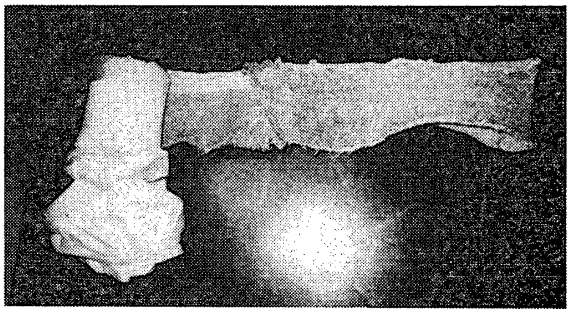

図14　総絞りの羽織の仕上がり（篠島）

の嫁入り仕度の為に精魂こめて絞った訪問着であるが，母親の暖かい愛情が伝わるようである．

島の女達は，常に危険と背中合わせに漁をしている男達を思い，不安と戦いながら，また大漁を願いながら一心にイタコを絞ってきたのであろう．絞台一つとってみても，何十年も女達と苦楽を共にした，その心情がにじみ出ているようである．

(4) 島の現状

現在においては，図16のように，今までの技術を受け継いだ高齢者が細々と絞っているに過ぎない．括りの技法は長年の経験が必要であり，工賃も一反300円～２万円と幅があるが，１か月9000円程度にしかならない為である．最近では，中国へも出荷され，工賃の上昇は望めない．製品も高級な総絞りから部分的な模様が多くなり，安い物を多く売る方向へと変化してきている．絞り，特に総絞りは大変高価であり，染色史上においても華麗で贅沢の極みであったのに対し，工賃の余りの安さにギャップを感じないではいられなかった．

クーラー等の普及で昔はセコで集まって絞っていたこの島独特の風景も今は少なく，娘達が島外へ働きに出てしまう為に漁業の後継者問題にも大きな波紋を投げかけている．

図15　総絞りの訪問着（篠島）

図16　現在の室内での絞り風景（篠島）昭和60年７月

しかし，老女達は僅かな賃金であっても収入が得られる為に喜びを感じ，生きがいを見い出している．若かりし日の自分の姿を思い起こし，また夢を託しながら一つ一つ慣れた手つきでシボを括っていく．その表情には日々の充実感が満ち溢れ，技術を守るという誇りさえ感じられた．また，老人同志が集まる為に一つの社交場ともなり，絞台と反物を抱えていそいそと出かける姿は，ほほえましくも思えた．

全盛を誇った絞りも今は衰退し始め，時代の移り変わりを感じさせる．しかし，絢爛豪華で多様な他の染織技術が爛熟の果てに消え去ったのに対し，絞りは時代時代にしっかりと根をおろして伝承されている．

お わ り に

古代より世界の各地で自然発生的に始められた絞りは，素朴ながらも多様な美の変化が得られる染色方法で，我が国ではその種類は百数十種類にも及ぶ．中でも鹿の子絞りは現今，日間賀島，篠島に伝えられているもので，華麗な高級品であると同時に，鹿が安産である為に人間もそれにあやかりたいという実利的な女の願いから，女達の憧憬の的であった．

絞りは上流階級だけでなく，庶民的な麻・木綿絞りが根強く行われ，こうした絞り染めの持つ幅の広さが，日本の長い染色工芸の歴史の中を生き抜いてきた強さであり，何千年も前から日本人が優れた美意識を持ち，美への飽くなき情熱を燃やしていた事が，今日の絞り技術の発展を生んだのである．

この絞りが更に家内手芸として普及し始めたのは昭和の初め頃からで，より生活の中へ浸透した．

以上のような時代背景を受けて，日間賀島，篠島にもイタコ（絞り）が普及し，今日に至ったのである．両島では女は漁に出ず，特に篠島では伊勢神宮との関係から女は不浄のものとして漁の道具に触れる事も忌み嫌う習俗があり，また，農山村と異なり，水田耕作の土地もない為，女達にとって絞りは最適な副業であった．往時，娘達がセコで集まって絞る時，そこは一つの社交場ともなり，島内結婚も多く，漁業の後継者にも困らなかった．最盛期には副業とはいえ漁業収入よりも上回り，島の経済を支えたが，現在では工賃の安価な韓国，中国への出荷，島の観光化等により，衰退の一途をたどり，時代の推移を感じさせる．しかし，老女達はたとえ低賃金であってもお金ではあがなえない，自己の生きている証（あかし）としての「イタコ」に昇華された喜びを感じ，お互いに睦み合いながら，シボの一つ一つに女の細やかな心情を絞り込んでいるのである．その思いが独特の凹凸となって表現され，人々にぬくもりを感じさせる．

絞りは，我が国の文化の中で何千年もの間，陶汰熟成されてきた．今日，三河湾における離島において，イタコが島民の生活とからまり合いながら，地下水脈のように営々と受け継がれている事は，人々に時代を超越した生命の躍動さえも感じさせる．

最後に，本調査に御協力頂き，貴重な資料の写真撮影をさせて頂きました現地の方々に深く感謝申し上げます．

文　　献

1）北村哲郎：絞，芸艸堂（1970）
2）中江克己：日本の染織，**12**，絞り染，泰流社（1978）
3）山辺知行：日本の美術，**7**，染，至文堂（1966）
4）石崎忠司：きものの染と織，衣生活研究会（1981）
5）岡田精三：有松志ぼり，有松絞技術保存振興会（1982）
6）南知多町誌編集委員会：南知多町誌，南知多町（1981）